The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グラネについて 小記
Author(s)	谷田, 孝之
Citation	中国研究集刊. 1998, 22, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グラネについて　小記

谷田孝之

マルセル・グラネ並びにその論著について記したものは数多いに相違ないのであるが、私の手許にある僅少のものの内で、これらについて概説的なものとして最も適当と思われるものは、グラネの『中国人の宗教』のM・フリードマンの英訳書 The Religion of the Chinese People, Oxford 1975 にみえる導入的小論である。以下これによってグラネに関し簡単に紹介しよう。

グラネの作品では、中国人の生活に関しての観察はあまり使用されていない。彼の精力は、前史、封建制、初期皇帝時代の中国に注がれている。グラネに未刊の著『王は飲み王妃は笑う』がある。この作品は『中国文明』一九二九年より遅いものではない。R.A.スタインは、もしこれが完成されていたら、中国社会、家族の大建築の頂点に立っていたであろう、と云う。

フランスにおいて、第二次大戦後、グラネの重要な数種の作品が普及版『中国についての社会学的研究』一九五三年に集められた。グラネの中国学、社会学を結合した作品は『中国文明』（一九二九）、『中国思想』（一九三四）『中国人の宗教』（一九二二）『中国封建制』（オスロでの講義）（一九五二）等が挙げられる。フランスの中国学は、彼が生きていたほどには社会学的でない。フランスの社会学は彼の努力の意味を十分には意識していない。

英語世界において、グラネの名声が立てられた最初の訳本は『中国文明』（一九三〇）、『祭礼と歌謡』（一九三二）、グラネの小論では「中国における右か左か」（一九七三）、「中国人の思想」（一九三四）である。レビ・ストロースの『親族の基本構造』の英訳（一九六九）より以上に英語世界での社会学的人々にグラネについて教えたものはないであろう。だがこの訳本は、中国における親族と結婚についてのグラネの社会学的研究の基礎、彼の意図の一般性を十分に評価してはいない。英語界における人類学界でのグラネの認識、中国古代の親族については、ラドクリフ・ブラウンを通してである。（ラドクリフ・ブラウンは、シカゴ、オックスフォードでの教育において、しばしばグラネについて言及している）。グラネがR.ブラウンを通して中

国人類学の拡大に進むことは（日中事変により）実現しなかった。

グラネは、一八八四年生まれ。

一九〇四年、高等師範学校の歴史科に入る（ディルケイムは一九〇二年より教育を始めている。）一九〇五年、古くよりの念願の中国研究の上でディルケイムの門下生となった。一九〇七年、バスチアの予備校で歴史を教える。

一九〇八年より三年間 Fondation Thiers 校の自費生となる。ここでは、封建時代における名誉意識の研究を志す。日本における場合を意図したのであるが、シャバンヌは、日本の研究に入るには中国より始めるように勧めた。シャバンヌに勧められ、極東にかかわるテキストに取り組む準備をする。すなわち民族学的資料を集めることである。

一九一〇年、問題として、中国家族に到達した。封建的グループと家族グループとのかかわり。一九一一年、礼（喪服制、親族関係、結婚等に関するもの）の研究。ティール校での三年間、ディルケイムの社会学を、中国社会、家族儀礼の上に働かせようとした。一九一九年の『祭礼と歌謡』は、シャバンヌとディルケイムへの捧げものとして書かれたものである。グラネの掴んだ基本的な問題（儀礼と神話、家族親族組織と結婚）。生徒達は神話・儀礼の方では有頂天になったが、親族についての複雑なる議論には途方に暮れてしまったようである。（一九三九年の『結婚のカテゴリー』は極めて錯雑なものである）

一九一一―一九一三年、ティール校での奨学金で北京に行く。シャバンヌの周旋による。グラネの狙いは、中国人の生活を学ぶことではなくて、中国の古典、テキストを集めることであり、一種の野外作業である。ペキンにおける彼は、中国文学者たちから得ることよりも、シャバンヌが以前から教えて来た中国テキストや説明書に自身を連結することに多くの時間を費した。シャバンヌがグラネの公費出張による作業の報告を求めたことにより、グラネが書き上げたものが、Toung Pao における出版の「古代中国の結婚習俗」（一九一二）である。この著は一九一九年の『祭礼と歌謡』の議論の核となるものである。グラネが自身で出版した最後の著作が『結婚のカテゴリー』と名づけられているが、比較の上で後者は法的な骨格の中にはめられたものとなっている。

一九一二年、中国革命の混乱の間の彼の経験が北京から彼の友人に報告されている。それによると彼はホテルからの撤退の際、大急ぎで二十四史や社会学的テキスト等を袋詰めにした云々と。中国での観察者としての彼は二つの均等な対立的神話をもっている。一つは、グラネは観察する気ではなかったこと、一つは、現今の野外研究家群の型の

中にあった。ポアリエは、現代的主題のフランスの創設者の間で、ディルケイム、モース等の椅子に坐って理論的に世界を見た連中と、グラネ、グリオール等の野外活動の経験の上で理論を作った者とを対照せしめる。だが、実際は、グラネの北京滞在中の活動は、ほとんど、フランスを去る前の研究態度とあまり違ってはいないようである。

一九一三年、フランスに帰国してからは、マルセイユの学園（モンパリの大学予備校）その他で歴史教育をすることを再び始めた。しかしこの年の終りに、シャバンヌを嗣いで高等教育実践学校で極東宗教の指導者となった。最初の講義の広告せられたるプログラムは、水の儀礼と『儀礼』士婚礼であったが、実際は中国古代宗教の番組であった。この研究番組は彼の生涯の題目としての「中国文明」の中国制度を意図したものである。この研究のためにできるだけ遡らねばならない。その第一歩は『説文』の調査、次に『儀礼』士婚礼による貴族の結婚の勉強、第三に、水・雨等に関係するテキストの分析。要するに公的テキストに示される公的宗教の背後にある通俗宗教への社会学的滲透と対になったテキスト、言語の分析の上におかれたる方法である。この方法の中における初期民族学的要素は、後には新しい民族や、外人あるいは土人の観察によって補われることになる。

視力が弱いために、はじめ、軍隊での奉仕は為されなかったが、一九一四年召集がかかり、北京に行かされた。歩兵として二度負傷、一九一七年、前線から離脱（この離脱は、軍需大臣付きであったレビーブリュルの世話によるものとの話もある）、士官訓練所におかれたが軍曹止まりであった。西部戦線で戦ったが、休暇をとる度に中国研究を遂行した為、一九一八年の九月、将軍付きとしてシベリアに行った。アメリカ、太平洋を通ってウラジオストックにも行った。シベリアで復員となり、中国に移された。これが最後の二度目の中国行きであった。

一九一九年、フランス帰国、結婚、学者生活を取り戻した。

一九二〇年、博士号の試験を受ける。J・フレーザーがフランスに居ると聞いて、試験の審査員への指定を獲得したが、目撃者の報告では、フレーザーは、フランス語におどおどして一語も言わなかった。

この年代の主な著作は『祭礼と歌謡』（一九一九）、『ソロラート婚』（一九二〇）、「中国人の言語、思考の特異性」（一九二〇）、『中国人の宗教』（一九二二）、「子供を地におくこと」（一九二二）「生と死」（一九二〇―二一）、「葬儀による悲哀の表現」（一九二二）である。実践学校でのコースが一九一九―二〇、出産より成人までの習俗、喪、

結婚、親族の講義でもって再び始められた。この型は彼の死まで続いた。一九二六―一九二八、暦、荘子、淮南子について講義をした。一九二九―三九年の十年間、道教における種々のテーマを扱った。一九三九―四〇、山海経における崑崙山の講義をした。

実践学校における授業は、彼の学者としての生涯の中で最も厳しい部分であった。だが一九二〇年、若干のレベルを下げて、ソルボンヌで「中国文明」の歴史を述べるように指示された。一九二五―二六年まで続いた。一九二六年、東洋語の国立学校で極東の歴史、地理、制度の教授。同年新しく創られた中国高等研究制度の指導者。

これまでの簡略な説明の内で、グラネの社会学者、民族学者としての面はあまり現われない。彼の学問的生活の内で、親友として、M・モースがあり、またディルケイムの家系の内にある社会学的学者の群の内で行動した。三十歳代の暫時、社会学のフランス学会の総長であったが、著作の上では社会学的活動は中国に関するものを除いては、あまり反映されなかった。出版された主なるものは、『中国人の宗教』(一九二二)、「法と家族」(一九二二)。後者はウエスターマークの『人間婚姻史』等を扱った匿名での評論である。人は博識で鋭敏なるディルケイム学派の者の作と想像するであろうが、実はグラネの唯一の精一杯の非中国学上の評論であった。

次の非中国学的論述の「ディルケイムの宗教的社会」(一九三〇)について、ディルケイムの要請の「挙動、感情、観念、そして宗教的現実の規則の創造的作為者は社会的生活そのものであるとの観念を泌みこませることによって、心理的知識に豊かであるべし」はグラネの中国宗教に関する作業の基礎となる。社会が先頭におかれねばならない、一つの社会観念が一般的心理学から抽出された規程で汚されたり消されたりせてはならない。かくて宗教の境界をきめる問題に取りかかり、中国テキストの徹底的分析を行う(ディルケイムの『宗教生活の原初形態』の根本にあるところの聖俗の問題、データの完全なる批判的評価への依存)。フレーザーがオーストラリヤのアルンタ族を最も原始的であるとすることに反対する、アニミズム、自然主義の理論に対して、ディルケムは、死者の崇拝、祖先祭祀は原始的であるどころか、進歩した社会にのみ現われるものであるとする。早期農民社会の聖所と連合したる未分化の群から現われるものであるとする。聖と俗との根本的対立はその起源を社会生活の二つの状態の間の対照の中にもつ、俗的生活は社会的活力が弱く、人々がバラバラに生きるときに相応する、その反対に聖の生活は個人的意識が高

揚するところの強い実り多き活力の時である。宗教観念はその力を再生するための人間グループ、社会紐帯によって意識せられる最高の希望の内にもつ。ディルケイムは、個々人が共通の感情を共通してもつところの祝祭・集会なくしては、人類はあり得ないことを示す。ディルケイムのオーストラリヤの世界はグラネの『祭礼と歌謡』の世界と一つのものである。宗教の社会学は思想力、時間、空間等のカテゴリーの構成を我々に知らせる。グラネの集団結婚の理論に対するディルケイムの批判に、グラネが恐れ入ることがなかったとき、グラネは反ディルケイム信奉者であったが、原始的階級制についてのディルケイム、モースの作業を使用している（但し、彼らの論拠がデ、ホロートに拠ったもので、十分ではなかったことをニーダムは指摘している）。グラネはデ・ホロートには興味をもたず、その資料は中国テキストにあるが彼の分析も十分ではない（これはディルケイムの基本的形態の内に主張せられた「全体のカテゴリーの優位」の尊重と、彼の社会学的要請に基づくものにすぎないものである）。

第三の中国学的著述について、一九三二年、「社会学のフランスの制度」での会合のとき、フォーコーネットとの討論のときのグラネの言「私は哲学者ではない、絶対的に社会学を教育するには不適当である」。一人の教師によって推進せられた狭い理論を説明することを避けることを強調し、社会学の教育は本質的にすでに完成された社会学的進歩を説明するために選ばれたる問題を扱うことにあると彼は考える。例えば、「自殺」と「ポトラッチ」に関することでは、まずこれらが問題として選ばれる前に、その歴史にとりかからねばならない。グラネは中国学の教師を自認する。

社会学的方法についての彼の見解を知る上での二つの大きな課程。『踊りと伝説』（一九二六）の長い導論の中で彼が述べることに、まず第一段、中国テキストの全体の内に、歴史の雑片の配列を課するところの神話的テーマの一群を創ること、第二段、これらの群を中国歴史の発展への鍵とする。この場合に、古代の細分的社会から首長制、都会生活が現われる。外交的議定書によって規定せられたる交換の原理の上におかれたる封建制度の出現。ある者は「社会学」を「歴史なき人々」に局限しようとするが、社会学的分析こそが歴史の大きな人々の発展を明らかにすると思われる。

グラネは、所謂民族学的比較を拒絶する。ディルケイムも浅薄な比較民族学を拒否する。グラネの全体的中国についての作業のモデルは、ディルケイムの講義の理解の内におかれる。モースが彼のおじディルケイムの観念を次第に

展開させたところの民族学的方向は、多くの点においてディルケイムの主義によって影響せられる以前のものを相変わらず残しているようである。グラネは晩年において（恐らくモースによって励まされて）民族学的方法によって為されたる進展と人類学的明証の価値を理解したに相違ないことは、『中国封建制』の内で彼が明らかにしている。だが彼の本来の研究タイプを変更するための理由を認識することに取りかかったのではない。グラネのディルケイム規範への熱烈な研究は、初期、一九一一年、中国に向かう以前に制限せられた。しかしそれ以前のディルケイムの作品を、「基本的形態」は別として、社会学的教育の基礎としてのあの初期のころの意図をもって読んだとは私は思わない。リュークによるとグラネは初期においては社会学者として現われる、そしてモースの理論的貢献は概してディルケイムの社会学を作動させる（グループの隠されたる神秘主義、群集心理等の最小にしか受容され難いものは強調しないで）ことの結果である、とされる。だが、グラネは、グループ神秘主義、群集心理学をも大量に保持した。グラネに対するディルケイム、モースの重要性は正確に指摘できる。

グラネの中国原典に対する社会学的立場は印刷せられたテキストへの全体的忠実にあった。他の学者の中国観察は排除することもあったようである。『祭礼と歌謡』において彼はしばしば、デ・ホロートをも利用しているが、その分析の価値について全体的に懐疑的である。

グラネの初期作品は比較民族学的資料への多くの参照を含んでいる。『祭礼と歌謡』においての付録Ⅲの如きものである。後期作品においては、比較上の参照が消えて行く。これは非中国のものに対する不忍耐から来ると思われるかも知れぬが、実は非中国の民族学が中国を考える上で私的な原因から来つつあった。以前の彼の弟子であった E. Mestre が一九三一年グラネとともに実践学校でインドシナ宗教の講義の教師に任命せられた。グラネと彼との学問的連続は固より緊密である。一九三九年『結婚によるカテゴリー』が仕上げられたとき、グラネ、モース、メストルの十分なる討議が為されたに相違ない。メストルは、カチン族、インドシナ民族の結婚の講義をしていた（一九三六、三七年）。『カテゴリー』の内において、グラネによって示されたる民族学的沈黙は、メストルの探求の恩恵をグラネが吸収したことによるのに相違ない。

グラネは彼の晩年において中国の社会と思想の全体的分析であろうとするところのものを作りにかかった。全体性は歴史的時間において、そして資料の配列において制限せられたる何かを意味し続けたに相違ない。さらに、彼の作

業は一層純粋に社会学的制限によって印づけられた。中国文明の大きな多様性は、『中国思想』『中国宗教』から判断せられるように、できるかぎり少ない思想と秩序の原理に還元することができる。中国の全体化的単純は中国学者からは賞められそうにない（彼らにとっては、中国文化の絶えざる変化と創造性が自明である。）

グラネは、何故に中国学者にとって社会学者のように見えるか、を知ることができる。彼の中国への狭い集中の故に、社会学者にとって中国学者と見られることができよう。だがグラネは全く逆に普遍的人道主義者であり、彼にとって「中国文明」の研究は、ヨーロッパの地方主義、交互的文化世界の探索の限界から脱出することであった。『中国封建制』の中の数行でこのような趣旨のことが述べられている。「その広さ、継続、団塊において、中国文明は最も強力な人類創造の一つである。その様な世界に到達するためには、私は古典研究に取り囲まれた世界から出ねばならぬ」と。彼は中国の特殊なケースでありながら、モース派の人々によって探索せられたる集合的普遍的文明を見ている。

彼は、ある標準においては中国文明の発展史を書くために社会学的（ディルケイム的）方法を使用することに取りかかり、さらに広く一つの文明の集中的研究を通して、大きく人間性を理解するために比較民族学を無視する。グラネの言「私は中国だけに係わるものではない。私の興味は人間だけである。」

一九四〇年、死、五六歳。

付記

学生時代、『儀礼』注疏を読んでいた私は、戦後復員してから、礼を勉強するには補助科学として絶対に民族学関係資料に依らねばならないことを知り、広大中哲研究室にあるものを片端から読むことを始めた。これに当たっては当時の池田末利先生の絶大なる御援助を頂戴し、今においてもまことに有り難く感じている次第である。そのとき読んだ書物の中で特に役立ったのはタイラーの『原始文化』フレーザーの『古代社会における死者の恐怖』等である。フレーザーは死者の恐怖は宗教のはじめではないか、という。これによって『儀礼』の士喪礼、喪服（服、居、食との関係の上で）を原始宗教の面から考究し、『中国古代喪服の基礎的研究』をまとめた。喪服は、宗教学的な面とは別に家族制度究明の鍵となるものであることというまでもない。そこで当然、私は中国古代家族制度の研究に入った。この方面で拠るべき参考図書の筆頭は加藤常賢先生の『中

国古代家族制度研究』である。この書には中国図書、西洋図書の大量が引用され、徹底した分析、解明が示されている。引用の民族学関係図書には、モルガン、フレーザー、ラドクリフ・ブラウン等のものがしばしば現れている。ところが、本来、家族制度そのものの原理が極めてむつかしいものであり、加藤先生の書を反復読み直しても、部分的には理解することはあっても、全体的構造、根本的骨格を把握することが私には出来ない。そこでこの方面の明快なる概念を得るため、親族・家族に関する人類学上の図書をあれこれあさっていた。その内、ふと、教官室にレビ・ストロースの『親族の基本的構造』が目にとまった。実は、これまで社会学、民族学上の図書を読むのに必要なため、独学ではあるがフランス語の勉強をやって来ていたので、レビ・ストロースの書を見て、その内容がどうやら理解できそうであると感じ、これを徹底して勉強しようと決心した。この書において、レビ・ストロースの論説の対象としてグラネの『結婚のカテゴリー』が大きな存在であることを知り、是非この書（のコピー）をも手にしなければならないことになり、あちこち図書館に照会した上で、結局、東洋文庫からこれを入手した。グラネの『祭礼と歌謡』の邦訳はすでに目を通していたのではあるが、親族組織・家族制度に関するものとしてはこれが最も主だったものである。これ以後は、グラネの著述をできるだけ集めることとし『中国文明』『祭礼と歌謡』『踊りと伝説』『中国人の宗教』（英訳）『封建制度』、一九五三年の大学出版『社会学的研究』（この内に『ソロラート婚』「結婚習俗」を初めとして「右と左」「子供を地におくこと」等、計九篇が収めてある）等を手にすることができた。グラネの書を解読する上で必要な英文テキストとしては、シャバンヌの『史記』、クーブラーの『左伝』『礼記』『詩経』『儀礼』等も徐々に整えて来た。現在まで数十年をかけてではあるが、兎にかく一応は読み、要約程度ではノートしている。先に『結婚のカテゴリー』と『中国社会』を渓水社より出版したが、これは私が十分の自信を以て斯界の方がたに読んで戴かんがためではなく、まだまだ未熟の私が中国古代家族・親族制度の上で私なりに納得いくようになるために、さらに繰り返し読み砕くにはどうしても邦訳しておかねばとの意図が主であるからである。既刊のものになお校正の不十分、訳の不適切のところもあるであろうから、読者先生方から御指摘を仰ぎたいのであり、未刊のものについては、神話、習俗、諸制度等の上でグラネより啓発せられるべき内容のものが豊富に存するわけであるが、私にはもはや余力もないわけであるし、後を継続遂行して戴けるならば、私にとってこれに勝る喜びはない。　以上